
新しい流星

槻誓雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新しい流星

【Nコード】

N9797I

【作者名】

槻誓雄

【あらすじ】

ロツクマンら電波人間が最後に地球を救ってから25年後
地球に新しい脅威が近づく

スバルとミソラの子供 星河ソラが仲間と共に立ち向かっていく・・・

新しい流星

こんにちは

いや、こんばんは？

それとも、おはよう？

いずれにしてもはじめまして、僕は一応ロックマンです

といってもEXEでもなければ熱斗くんもない

地球を4回も救っていないければ、髪の毛はニワトリのトサカのように
なっていない

地球を4回救ったロックマン 星河スバルと日本で知らない人はい
ないという響ミソラ

本当は星河ミソラなんだけど

ともかく目立ちすぎる親がいるただの子供

星河ソラです

一応いつとくけど男だからね。髪は少し長いけど

僕は星河スバルのウイザードだった・・・親を呼び捨てしちゃいけない

お父さんのウイザードだったウォーロックと電波変換してロックマンに変身して

地球を救った・・・ことなどない

たまに電波ウイルスと戦っているだけで、それもある意味地球を救っているけど

このごろサテラポリスの人達が電波変換してたたかっていて、あまり出る幕は無い

ヒーローはいつか消える宿命なのだろうか

ていつても、ヒーローは親だけど

唐突だけど続きはまた今度！

さようなら！

新しい流星（後書き）

連載始めちゃった

流口ク3やっつてないのに（おそいし バカ）

ブラックエースさえ中古屋にあれば年内に続きを書けると思います

朝

おはようございます

今あなたが読んでいる時間は夜なのでしょうか一応こちらの時間で
言わせていただきます

言ったように今は朝

僕は早寝早起きが得意なので一年前から僕のウィザードになったウ
オーロックは

「スバルを起こすのはめんどくさかったんだよ」

と半年以上もつぶやいていた

今のお父さんのウィザード レンドの運命を思うと涙がでる・・・
おもしろくて

言うてはいないが、僕はウオーロックにもお父さんの朝寝坊に責任
があるのではないかと思っている

子供の頃からお父さんを起こしていたといっていたウォーロック

一度ぐらい起こさず大恥かかせたってよかったのではないか、と思
っている

こんなこと口に出していったら二度と電波変換させてくれないだろう

部屋を出てリビングに下りても人の気配はない

机の上にお母さんの字で書置きがあったので読む

様々な言語で修飾されているが要するに忙しくて朝ごはんは作れな
いということだ

忙しいなら長ったらしい書置き書かなくなっただっていいじゃないかと心
の中で突っ込む

自慢じゃないが僕は自分で料理を作ることが出来る、美味しいし・
・自慢ですね

ご飯を作り終わった後皿洗い機が壊れているので自分で洗う

その間ウォーロックはソファに座ってテレビを見ていた

ウィザードって人の生活を助けるためにいるんじゃないだろうか？

皿を洗い終わって、ウォーロックのすわっているソファにむかう

余談だがソファに座るときウォーロックが立って座る場所を空けてくれた

きみは座る必要はないんだから最初から立っててくれ

そういいたくなる口を閉じながらあげてくれたソファにすわる

学校へ行く時間がきてあらかじめ用意していたバックを持ち玄関へ向かう

「いってきます」

もちろんだれも家にいないので返事は返ってこない

朝（後書き）

終わり方が変ですね

文章力がないのですからしかたありませんが他の小説も読んで

少しずつ上手くなっていきたいと思います

流口ク3 B A 見つかりません R J 買うしかないんでしょうか

メール

「ソラ、メールだ」

急にウォーロックの声がして心臓が縮み上がるがウォーロックにびつくりしたことを悟られないように注意して返事をする

「こんな時間に？だれから？」

「サテラポリスから2件」

そっけない返答だ。メールの内容ぐらい言ってくれたっていいじゃないか。

と心の中で愚痴りながら携帯端末を取り出す。ウォーロックはメールも開いてくれてなかった

「近頃、人工的に強化されたと思われる電波ウィルスの被害が報告されて -

「口に出して読むな、俺はもう読んだ」

ウォーロックが冷たい口調で言い放つ

だったら最低限メールを開いててくれよウォーロック
僕は涙でいっぱいになった心のなかでメールを読む

「近頃、人工的に強化されたと思われる電波ウィルスの被害が報告されています。」

強化されたと思われる電波ウィルスを見かけた場合戦おうとせずに

サテラポリスまで通報してください」

もう一件のメールは、サテラポリス特別戦闘員へ と書いてあった

「先のメールのように強化ウィルスが確認されています。

近くでサテラポリスへ通報があった場合、自動的に近くにいる戦闘員に報告されるので、必ずとは言いませんが、できるだけ通報のあった現場へ急行して原因を突き止め、ウィルスだった場合デリートしてください」

「強化ウィルスか、今までのより戦いがいいけどな」

さっきまでの態度と打って変わってごきげんのウォーロック、画面の中で暴れまわっているが見える

「強化ウィルスか、どんだけ強いんだろう？」

桜の木を見ながらつぶやく、桜の花は昨日の雨のせいでほとんど落ちて
ちている

「けっ！強化つったてウィルスだろ？楽勝に決まってるじゃねえか」

その後、ウィルス相手にどんな事をしたか聞かされた

5秒でウィルス10体を倒したとか、あゝとか、こゝとか
ザコを倒したことを言っても自慢にならないだろう

そして戯れ言を聞き流していたら気付けば学校、5 - Aの教室に入り
バックを机に置いて周りを見渡しても誰もいない

なぜなら、今は7時40分、授業が始まるまで40分以上もある
今のところクラスには僕だけだということになる

ウォーロックはまた学校の探検をしているのか、端末を見てもいない
誰もいない時間をおだやかに過ごせた

去年までは・・・

そのとき廊下から声がして元凶がきたことを知らせる声が聞こえた

メール（後書き）

短いし、グダグダですね
ブラックエースまだ見つからないです
カモン！ブラックエース！

天敵

「ソラ、いつも早いね」

振り向きたくないけど振り向くと奴はいた

僕の幼馴染であり席が隣であり天敵 灯軒^{ひのき}スマレ

幼稚園はいつしよだったが、小学校に上がってからは2クラスしかないのに、4年間みごとにちがうクラスでしゃべる機会がなく、今年の4月のクラス替えで初めて同じクラスになり4年ぶりにしゃべることができるようになった

僕が無視するとスマレは自分の机、つまり僕の隣の机にバックを置くと隣のクラスのいつしよに学校に来た女子のところへ行った
スマレが見えなくなってから、僕は持っていた本を持ち直し読書を再開した

そのあと、仲のいい奴も登校してきて授業が始まるまで最近の話題をしゃっべていた

五時限目 社会

大半の生徒はうでを枕にして寝ている、隣のスマレもみんなと同じようなかつこうをして寝ている

授業の内容は歴史、100年以上前に生きていた人達の授業は、今の授業より内容は濃かったのだろうか

「あれ？おかしいな」

いままで一本調子で教科書を読んでいた先生がすつとんきょうな声を上げた

その声で寝ていた生徒も起きはじめ

僕は教科書の影にかくして読んでいた本から顔を上げ先生のいるほうを見る

そしたら先生がすつとんきょうな声を出した理由が分かった

ブラックボードの文字がおかしくなっている

「ウイルスかな？頼むぞ、我が相棒」

と先生が自分の端末に向かって声をかけた

数十秒後

「ご苦労、つてどうした、その傷？」

これまた先生のすつとんきょうな声

その声に教室にいた全員が目覚める

席をたつて話し始めたり先生のそばに近寄って何が起こっているのか聞いたりしている

話を聞くと先生のウィザードがウイルスにデリート寸前になったということらしい

「ねえ、ソラ、これって朝のメールでいった強化ウイルスかな？」

突然横から話しかけられて横を見る

スマレが興味津々という顔でこちらを向いていた

「さあ？強化ウイルスかな？でも先生のウィザードが弱すぎただけかもしれない」

僕がそういうとスミレは顔を先生の方へ向けて

「でもあの先生ウィルスバスターは強いつてウワサだよ」

「ソラ、強化ウィルスなのか？」

ポケットにある端末からウォーロックの声がした
僕はポケットから端末を取り出して答える

「そうかもしれない、なに？いくの？」

「いくに決まってるじゃねえか、電波変換するぞ」

ウォーロックがディスプレイの中で暴れまわっている
スミレは先生のそばに行っている

「はいよ、じゃあ、いこっか」

周りを見渡す

みんなはブラックボードに注目しているがいきなり僕がいなくなっ
たらたぶん気付くだろう

ばれないように教室のドアを開けて廊下に出る

端末のディスプレイを見るとウォーロックは待ち遠しそうにそわそ
わしている

端末を持った右手をあげて

「電波変換！星河ソラ・オン・エア！」

天敵（後書き）

無駄に長い・・・

早く3を買って話を進めなければ・・・

レッドジョーカーを買っしかないのか

電腦

ブラックボードの電腦にサイバーインをするとデンパくんがウィルスに追いかけていた

「たすけてください」

デンパくんの悲痛な声

その声に気付き、デンパくんを追いかけていた電波ウィルスが新しく入ってきた新参者に目標を変えてこちらにやってくる

「ソラ、いくぞ！」

ウォーロックの楽しそうな声

「わかってる！」

僕はウォーロックに答えた後、かまえながら叫ぶ

「バトルカード！キャノン！」

左腕が大きな銃になると、こちらにやってくるウィルスにむかって的確に放つ

「たおしたかな？」

ウィルスがいたところは煙があって見えないので、デリートしたか分からない

「いや、まだまだ、やっぱりこいつらは強化ウイルスらしいぜ」

ウォーロックが言い終わる前に電波ウイルスが煙の中からでてきた傷を負っているが、動きから見る限りあまり重傷ではないらしい

「バトルカード！ワイドソード！」

左腕をキャノンから幅の広いソードに変えて迫ってきたウイルスの間合いをつめてソードで攻撃する

さすがに強化ウイルスといえど一瞬動きが止まった後消えていった

「けっ！強化ウイルスっていったってたいしたことねえな」

ウォーロックの不満げな声

「いや、ロックマンさん、おひさしぶりですね」

「え？」

デンパくんが近寄って来て意味不明な発言をする

「ロックマンさんイメチェンしたんですか？髪型が最後に見たときとちがいますけど」

デンパくんは僕のことを父さん、つまり、星河スバルだと思っているのだ

僕は父さんのように鶏のトサカのような髪型はしていない、その代わり髪が長いのでトサカの代わりに

髪の毛がいつもなびいているような髪形をしている

「こいつはスバルじゃねえぜ」

ウォーロックが僕が言おうとしたことをいつてくれた

「スバルさんじゃない？じゃあこのロックマンさんは誰ですか？」

デンプクんのすっとんきょうな声、

「こいつはソラだ、星河ソラ」

「星河ソラ？ああ！このクラスの！ロックマンジュニアということですか、いや、光栄です。二人のロックマンを見ることが出来たんですから」

「父さんを知ってるの？」

僕が聞くと、デンプクンが誇らしそうな顔をした・・・はず、だつてデンプクンの表情とか分かんないだから表現できない

「スバルさんもこのクラスだったんですよ、親子そろって奇遇ですね」

「へ、そうだったんだ、あっ！もう帰るよ、じゃあね」

僕はデンプクんに別れを告げてサイバーアウトをする直前デンプクンの声が聞こえた

「ソラさん勉強がんばってくださいね」

電腦（後書き）

ブラックエース買いましたよ（いまさら）

シナリオ感動しました、もうちょっとで涙が出てきそうになりましたよ

3はストーリー性がいままでのより濃い気がします

家

電波変換を解除して現実世界に戻ると、みんなはまだブラックボードの近くに集まっていた

僕は自分の机にもどって教科書の下にかくしていた本を取り出し読みはじめた

その時、五時限目終了を合図するチャイムがなった

この音でブラックボードに集まっていた生徒達は、いまだにブラックボードの近くでおろおろしている先生を無視して、ロッカーからバックを取り出して帰りの準備を始める

～放課後～

「今日、ソラのうちに家の人っている？」

おろおろしっぱなしの先生がホームルームをなんとか終わらせて僕が帰ろうとしたとき隣にいたスミレが聞いてきた

「俺の家？だれもいないと思うけど？ていうか、なんで？」

僕が聞くとウォーロックがウィザードオンをしてから答えた

「ミソラならいるぜ」

この答えを聞いてスミレの目が輝いた
僕はウォーロックを見ながら聞いた

「なんでウォーロックが知ってるの？」

「昨日、ハーブから聞いた」

いつもケンカしているのに、いつそんなことを聞くんだろうか

「ソラのお母さんって響ミソラでしょ？」

僕はうなずく

「今すごいファンだからサインがもらいたいな〜っておもって」

僕はスマレの言ったことにながら歩き始めた

「ただいま〜」

僕は疲れた声で言った

なぜなら、スマレが響きミソラの魅力について学校から家までずっと語っていたからだ

「おかえり〜」

ウォーロックの言ったとおり、母さんの声の家から聞こえてきた

「あれ？ソラ、この子は？」

母さんがリビングに続くドアから出てきた

母さんは、何年か前にアラフォーの領域に入っているが、息子から

見ても、他人から見ても実年齢より若く見える
スマレに気づいた母さんはスマレを見ながら聞いた

「おひさしぶりです。ソラのお母さん」

スマレが僕を押しつけて僕の前に出ながら言った
母さんは何度かまばたきしたあと、嬉しそうな顔をして

「もしかしてスマレちゃん？」

「はい！そうです！」

スマレが嬉しそうな声で答える

「色っぽくなったわね、学校じゃモテモテじゃないの？」

「いえ、そんなことはありません。あの、サインくれますか？」

スマレは後半を遠慮がちにたずねた

「あと私も！」

その声と共にスマレの隣にスマレのウィザード、ネイチャーがでてきた

ネイチャーは全体に丸っこく、茶色と緑色が基調となっている

「ウィザードにもファンがいるなんて幸せね、ミソラ」

いつの間にか母さんの隣に、青い琴の形をしたウィザード、ハープが出てきて言った

僕は話を聞いているのがバカらしくなったので、階段を上って自分の部屋に入った

「スミレちゃん、映画の試写会の券があるんだけど、友達と行ってきたら？」

自分で持ってきた色紙にミソラのサインをもらってはしゃいでいるスミレに券を二枚出しながら聞いた

「え！？、いいんですか？」

スミレは、はしゃぐのをやめて聞いた。ネイチャーはスミレが自分の分の色紙しか持ってきてなく、サインをもらえず、部屋の隅っこでじけている

「ええ、二枚しかないけど」

「二枚ですか・・・」

そういいながらチラッとソラが上がっていった階段を見る
その視線に気付いてミソラがいたずらっぽく笑う

「ソラと行く？」

「いえ、別にいいですよ、友達と行きます」

ミソラに言われて動揺するスミレ

「どうせ、ソラは暇だから大丈夫よ」

ミソラはネイチャーをなくさめているハーブを呼んでソラを呼ぶよ
うに頼む

家（後書き）

短くまとめられずグダグダと続いています

文章力が無いので目をつむって読んでください（そしたら読めねえよ）

早く話を進めなければ！

デート(?)前日 ソラの気持ち

「ソラ、ミソラが呼んでるわよ」

僕が部屋で本を寝転んで読んでいるとハーブが来た
次にハーブは僕と同様寝転がって本を読んでもウオーロックを見た
ウオーロックは僕の影響で半年程前から本を読むようになった、ジ
ヤナルは全て冒険物

「あら！ウオーロック、あなた、いつ読書なんて高尚な趣味を持つ
ようになったのかしらになったのかしら？」

そのハーブのバカにした声に気付いて、ハーブに本を投げつけるウ
オーロック

この本、僕のなんですけど・・・
ウオーロックが投げた本はハーブの顔面に当たる。ハーブには顔し
かないけど

「だまれ！琴ヤロウ！てめえみたいに雑音つくってるよりましだろ
うが！」

「雑音じゃなくて音楽よロックちゃん、まだまだ理解が出来てない
ようね。まあ、でも、あんたにしたら本でも読むだけすごいわね」

この言葉でウオーロックとハーブのケンカが始まった、毎日ケンカ
しているくせにネタがなくならないのだろうか

ケンカをしている二人を部屋に置いていって、階段を下りて母さん
のところに行く

下に降りるとなぜかネイチャーはチラシを持ってはしゃいでいた
母さんが階段から降りてきた僕に気付いた

「ソラ、明日ひまでしょ、スミレちゃんと映画見に行ったら？」

くくく

「ソラ、明日はスミレちゃんとデートに行くのか？」

リビングでテレビを見ていたら父さんが話しかけてきた

「デートじゃねえよ、映画を見に行くだけだから」

僕は父さんのほうを見ずに答えた

聞こえたのか、母さんがキッチンからいつてきた

「そういうのをデートっていうのよ」

「母さんが勝手に決めたんじゃないか」

僕が母さんに口答えすると

「あら！そうは言っても、嬉しいんじゃないの、本当は」

「別にうれしくないよ」

そうは答えたものの自分でも明日は楽しみだった。

それが、映画に行けるからなのか、スミレといっしょだからなのか
自分でも分からなかった

「寝るー！」

と、一言いつてから階段に向かう

「ソラ、本当はうれしいんじゃないのか？」

部屋にもどるとウォーロックが端末の中からでてきて聞いてきた

「ロックもそういうこと聞くんた、以外だね」

ウォーロックの質問に答えず、毒を含ませた言葉をウォーロックに送ったが通じなかった

僕はウォーロックの言葉を聞き流しながら寝る準備をする

「オレはスバルがガキの頃からいっしょにいんだぜ、人間がどう思ってるかなんて大抵分かる」

ウォーロックはそういうと端末の中にはいつていった

僕は布団にもぐりこみながら考えた

ウォーロックって何歳なんだろう？単純だし、口調は十代の不良少年だから、僕より生きてるとは信じられない

いつしか睡魔が襲ってきて眠りについた

デート(?)前日 ソラの気持ち(後書き)

人物の感情が上手く書けません(他も書けてませんが)

小説書くのって難しいですね

他の方たちはすごく上手くて・・・尊敬します!

僕も他の方たちと同じレベルになれるよう、日々精進します!

次は戦う・・・かな?

TKタワー

「ジョニー・・・」

映画が終わってみんなが退場する途中、人のすすり泣く声やつぶやき声、ハンカチを出して涙をふいている人が見えた

「感動したね」

と言っている割には涙声でもない声で、いっしょに歩いていたスミレが言った

「最後、ジョニーが」

「言っなよ、また涙が」

軽々しく感動の最後を言いかけたスミレをさえぎる

「ねえ、メシでも食べに行こうよ」

およそ女らしくない言い方をするスミレ

思えば、スミレがスカートを着ているのを見たことが無い

「メシってどこで食うんだ？」

僕が率直な疑問を口にして、それにスミレが答えようとしたとき、どこかで爆発音がした、一瞬の沈黙の後、床が少し揺れた

今まで周りですすり泣いていた声が止み、ハンカチに顔をうずめて

いた人達もハンカチから顔を上げて周りを見渡す

「どうしたんだろ？」

スマレが言い終える前にサイレンが鳴りひびき、何人かの警備ウイザードが出てきて言った

『TKタワーで異常事態が発生しました、お客様は係員の誘導にしがたがって非難してください！』

言い終わると警備ウイザードと従業員が他の人達を誘導し始めた
僕とスマレも、人の波にしたがって行動する

『ソラ戦わねえのか？この騒動は多分電波人間の出番だぜ』

ウオーロックが隣りにウイザードオンして、周りの耳を気にしてか
小声で聞く

「そうだとっても、スマレを非難させるのが先だよ」

僕もウオーロックに向かって小声で言う

「ウオーロック、こんなときにウイザードオンしたら邪魔だよ」

スマレがウオーロックに注意する

ロックは適当に相槌を打ち、その場から消えた

僕とスマレは人の波にしたがって映画館のある三階から一階へ降りた
僕は途中で人の波から外れて男子トイレに入った

「電波変換！星河ソラ！オン・エア！」

TKタワーの前まで来ると見知らぬ電波人間が、大勢の不恰好人型の電波体と戦っていた

助太刀しようとして近づくと戦っていた電波人間が気付いて言った

「タワーの中にはこいつらがいるはずだ、オレはいいからタワーの奴らを頼む」

僕はその電波人間の言ったことにしたがってTKタワーの中に入っていた

僕は知らなかったが、TKタワーの中では「電波の歴史」というものがイベントでやっていた

その中に電波人間の紹介があり、ロックマンはもちろんのことジェミニ・スパークやアシッド・エース、その他有名な電波人間の紹介もあった

『おい、ソラ！あいつらオレをぶっ壊そうとしてやがる！ぶっ倒すぞ！』

ロックの言った方向を見るとあの不恰好な電波体が三体おり、ロックマンの写真を壊そうとしていた

「ロックって自分のものにはこだわるんだね」

僕は正直な感想を言った後、電波体に向かっていった

TKタワー（後書き）

かなり投稿が遅れてしまいました

それに戦うと言っておいて、戦う直前で終わってしまい、すいません
上手くまとめられなくて

天神さんご助言ありがとうございました。」「直しました

ウォーロックとその他愉快的な電波体

ハープ（以下ハ）「地球へ来てもうに25年ね」

ウォーロック（以下ウォ）「ああ、短かったぜ」

ハ「あなたは25年前からガサツで変わらないわね」

ウォ「んだとハープ！てめえなんて25年前から琴じゃねえか！」

ハ「あんただって25年前から野蛮なけだものじゃない」

ウォ「オレ様が25年間でどれだけかつこよくなつたと思つてんだ
！」

ハ「ナルシスト発言はやめましようね、だれもあんななんてかつ
こいいなんて言わないわよ」

ウォ「んだとゴリアアア！ボコボコにしたろつかあああ！」

（以下省略させていただきます）

ハ「25年前のFM星人の来襲から一年もたたないうちに二回も
地球が危険にさらされてるわね」

ウォ「言つておくがオレはFM星育ちのAM星」

ハ「二回目は古代文明の再来、三度目はメテオGの接近」

ウォーロックの発言を無視して発言を続けるハープ

ウォーロックは発言をさえぎられていじける

ウォ「四度目の電波人間同士の戦いはメテオGから1年後だぜ」
いじけていたウォーロックが発言する

ハ「あんな小さい子が敵のリーダーだったなんてミソラもつらか
つたと思うわ」

ウォ「この戦いで俺以外の電波人間も知られるようになったな」

ハ「そうねえ」

ウォ「ジャックとカラス野郎にツカサとヒカル、暁と白チワワも戦っていたからな」

ハ「カラス野郎は分かりやすいけど、白チワワってアシッドのことかし」

ウォ「そういえば俺って何歳なんだ？」

ウォ「ロックはさっきのハーブのように発言を無視して違う話をはじめる」

ハ「そういえばそうねFM星は地球と一年の周期が違うから」

ハーブはさっきのウォ「ロックのようにいじけずに話に乗る」

ウォ「最低25年は生きてるって事だな」

ハ「あんたは25年も生きてるくせに成長しないわね。いまだに単細胞じゃない」

ウォ「んだとゴラアアア！」

終了！

ウォーロックとその他愉快的な電波体（後書き）

いやゝ変なもの書いてしまいました

この話で25年の間に何があったのか（僕の妄想）少しづつ明かしていきたいと思います

ということ、次は絶対ありますよゝ

失礼な敵

「お前達は何が目的だ！」

『・・・』

ロックマンの写真を破壊しようとした手を止めこちらを向く三体の電波体

一瞬の沈黙の後、三体の電波体は僕を無視してロックマンの写真に
向き直って破壊しようとする
その瞬間カチンと来た

「人が聞いているのにシカトこいてんじゃねえぞ！バトルカード！へ
ピーキャンン！」

僕は叫んだ後、自分の左手を大砲の形にして、シカトした電波体に
向けて撃った

「バトルカード！エドギリブレード！」

左手を刀の形にして、反応ができていない三体の電波体の間合いを
詰め、斬り捨てる

『意外と弱かつ』

ウォーロックの声が途中で止まる

僕は背中に視線を感じて振りかえった

振りかえると、いつの間にか、倒した三体の電波体と同じような形

をした電波体が何十体もいた
その電波体は一様に目が赤く不気味に光っていた

「怖え〜」

完全に裏返った自分の声

その時、一番近くにいたずんぐりした体型の電波体が見た目では考えられないような速さでタツクルをしようとしてきた

僕はすばやく反応してよけた後、タツクルしてきた電波体の背後に回りこんで左手の刀を使って肩から斬りつけてデリートした
電波体がいた方に振りかえりながら叫ぶ

「バトルカード！ワイドウエーブ！」

左手から横に長い水の衝撃波を続けざまに放ち、何体かの電波体をデリートした

「バトルカード！ロングソード！」

右腕だけが異様に大きい電波体が近づいてきて右腕を振り上げた瞬間、左手の剣で2連続に斬りつける

「バトルカード！グレートアックス！」

左手を不釣合いなほど大きい斧に変えて残りの電波体に近づいて一気に振りぬいてデリートする
周りを見渡しても他の電波体の姿は見えない

『おいソラ！何しやがる！』

ウォーロックの悲痛な声が聞こえた
ウォーロックが叫んでいる方向を見るとウォーロックの写真がちよ
うど首のところで無残に斬り裂かれていた。周りを見ると、足元に
切り裂かれたウォーロックの生首の写真が転がっていた、笑ってい
る顔が、かえって不気味だ

「ロック、自分の物にこだわりすぎだよ」

笑いながらさっき言った言葉を繰り返す、

『自分の物にこだわらずに、何にこだわるってんだ!』

ウォーロックが怒って言い返したとき携帯端末が鳴った

「あ、電話だ」

電波変換を解除した後、携帯端末を取り出して電話に出る。画面に
映ったのはスミレだった

「ソラ!あんだ今どこにいるの?」

とスミレが母さんのような言葉を言った

「心配してくれたのか?」

とっさに言い訳が思いつかなかったので話をそらす

「そんな訳ないじゃない」

ボクサーのパンチより速い返答だった

心に悲しみが広がっていくのを感じた

「お前は、どこにいるんだ？」

「映画館の前だけど」

その返答を聞いてから電話をきる

失礼な敵（後書き）

グダグダです

今に始まったことじゃないんですが

平和 戦い

平和だ

僕は何十年生きている単細胞とちがって戦うことはあまり好きではない

今は散歩に出かけていて、左側にコダマ川が見える

どうせ単細胞は家でハーブとでもケンカしているのであろう

TKタワーの戦いから三日後

戦いの様子はもちろんテレビでも放送され、僕の姿も少し映っていた

このことに関して父さんも母さんも

『これでソラもメジャーデビューだな』

とうるさかった。特にいつもそばにいる単細胞はうるさかった

平和だ

心の中でもう一度つぶやく

その時、携帯端末がメールの着信を知らせた

下らんもんだったら許さんぞ、という思いをこめてメールを読む
メールの送り主はサテラポリスからだった

電波体によるテロ発生、先日のTKタワーと同一の可能性。場所はTKタワー、スピカモール、シーサーアイランド、ナンゴヤ、サテラポリス隊員は至急現地に向かうことを要請する

昨日の記憶がよみがえる

「ソラ、明日、スピカモールに行くんだけどソラも行かない？」

その後、いっしょに行く知り合いの名前をスマレが言った

その誘いはこうして断っているが、スマレが危険かもしれない

単細胞を携帯端末で呼び出す

『なんだソラ？今日はずっと散歩じゃねえのか？』

「ロック、電波変換だ」

不機嫌そうな顔で現れたウォーロックにいう

『は？』

ウォーロックの不機嫌そうな顔から怪訝そうな顔に変わる

めんどくさいのでウォーロックを無視して右手を空にかかげる

ウォーロックは事態が飲み込めてなさそうだが端末に入る

「電波変換！星河ソラ！オン・エア！」

平和 戦い（後書き）

次回新しい電波人間が出てきますよ

上手くまとめられれば、のはなしですけど

メールにでてきたナンゴヤは分かると思いますが名古屋のことです

周波数（前書き）

今までよりかなり長いですよ

周波数

『で、どうしたんだ？』

電波変換した後、いきなりウォーロックが聞いてきた

「何が？」

いきなり聞いてきたのでウォーロックの言っている意味が分からなかった

『何がって、この状況だよ！いきなりなんだ「ロック、電波変換だ」って』

「内を僕の真似をしていうウォーロック、意外と器用な口をしているんだな

僕はメールの内容をウォーロックに伝えて、スピカモールにスマレがいるということを使った

『お前、スマレ、スマレって、そんなに好きなのか、スマレのことが』

いきなり聞いてくるウォーロック

ウォーロックに言われてうるたえる、スマレのことは友達として好きなのか、それともちがう意味で好きなのか

「分からない、でも傷ついてほしくないんだよ」

うるたえていたためか、つい本音を言ってしまった
ウォーロックに突っ込まれると思ったが、ウォーロックは何も言わ
なかった

くスピカモール

スピカモールでは見た限り電波人間は見当たらず、近くでワイザ
ードとTKタワーにいた電波体が戦っていた

出入り口付近にいた電波体は僕と他のワイザードたちによってデリ
ートされ、僕は奥に向かった

『なんだこりゃ!?!』

ウォーロックがすつとんきょうな声を上げた
僕も声を上げそうになった

なぜならワイザードの残留電波がそこら中に散らばっていたからだ

『この先には、かなり強い奴がいるみたいだぜ』

ウォーロックの緊張した声

イベント会場に入ると、敵と思われる、今までとはちがう、白い電
波体がワイザードに囲まれていた

その電波体は囲まれているが、あせりは感じられない

囲んでいたワイザードが包囲を狭めた時、敵の電波体が左手を上げ、
そこから緑色のビームを囲んでいたワイザードに放った

そのビームが飛んできた瞬間、ワイザードの周りに青色のバリアが
現れ、一瞬、防げると思われたが次の瞬間にはバリアを突き抜けて

ウィザードに当たると、ウィザードは動きを止めた後5秒ほどで消えて残留電波が残った
それを見ていた、仲間の後ろにいるウィザードたちは仲間が消されたのを見て動きを止めた

『ほう、電波人間かね』

ウィザードをデリートした電波体がこちらに気付いてダンディな声で言った

僕はイベント会場の真ん中へ来ると陰に隠れて気付かなかったが、何人かの人が、あの不恰好な電波体に囲まれており、その中にスミレがいることに気付いた

『おっと、きみが助ける権利は無いよ』

僕がスマイレに近づこうとしたのを見て電波体があった

『きみが助けようとした瞬間、私の合図であそこにいるゴーレムが人間達を襲う』

あそこにいる不恰好な電波体はゴーレムというのか

『お前は何が目的だ』

敵の電波体に聞く、答えは返ってこないと思っていたが、かえってきた

『ただの実験だよ』

『実験？』

『そうだ、まだ本番ではない』

その時、敵の後ろから攻撃を喰らわなかったウィザードが敵の電波体に一斉射撃をした

敵の電波体は攻撃を喰らいウィザードたちの方を向いた

一瞬の隙を逃さず、僕はスマレを囲んでいるゴーレム達に向かっていった

ゴーレム達はこちらを向いていたが抵抗もせず、僕にデリートされた

『貴様ああ!』

最後のゴーレムを倒したとき、後ろでわめく声が聞こえ、振り向くと、敵の電波体が右手を上げてビームを放とうとしていた

よけようとしたとき、後ろにスマレや他の人たちがいることを思い出し、踏みとどまって敵の電波体のビームを喰らった

目の前の蒼い電波人間が敵らしき電波体からビームを喰らうと、電波人間の姿が見えなくなったり人間の姿になったりして、電波人間の正体が分かった

「ソラ・・・」

『ソラが電波変換できるなんて・・・ウォーロックがいる段階ですうす感じていましたが』

ネイチャーが隣に現れて冷静な声で言った

「ソラを助けなきゃ」

『スマイレ、行ったら危ないです!』

ネイチャーの大きな声でビームを喰らい続けているソラの元へ駆けつけそうになった足を止めてネイチャーを見て言った

「でもソラが!」

『私がやります』

ネイチャーはそう言いながらわたしの前へ出た

『ウッドウォール!』

ネイチャーが叫ぶと敵の電流体の足元に電波の木が生えて敵の電流体を攻撃した

敵の電流体がその攻撃を喰らう前に一瞬早く気づき、ソラからネイチャーにビームを向けた

『くっ!』

ネイチャーが敵の電流体のビームを一瞬喰らって床に倒れる

スマイレはネイチャーに駆け寄って抱き起こした

そのとき目の前に影が現れ、敵かと思つて見上げるとソラだった

「ソラ……」

「やっぱり、ばれちゃったか」

そう言うと、蒼い電波人間はソラの姿になった

『けっ！お前があそこで止まったからだろ』

ウォーロックがソラの隣に現れていった、その後わたしの腕の中にいるネイチャーを見て驚いた声をだした

『おいスマレ！お前って電波変換できるのか？今まで気付かなかったが』

「え？」

わたしの不可解そうな顔を見て、ウォーロックはわが意を得たりという顔をしていった

『お前とネイチャーの周波数がぴったりなんだよ』

周波数（後書き）

新しい電波人間は出ませんでしたね（約束破り）
だれが電波変換できるようになったか、分かったと思いますけど

電波変換

「え？ほんとに電波変換できるの？」

スマレがウォーロックに食いつく

『ああ、できると思うぜ』

『スマレ、早く電波変換しましょうよ』

ウォーロックの返事を聞いて、いつの間にか復活したネイチャーがスマレをせかす

「電波変換する時って、なんて言ってる？」

立ち上がりながらスマレが僕に聞く

「電波変換、星河ソラ、オン、エアって言ってるけど、いう必要は無いよ。昔はトランスコードっていうのがあったらしいけど」

僕が答えるとスマレは端末を右手に持って空に掲げながら言った。
なんで知っているんだ

「電波変

『ウォーロック、電波変換ってどうやるんですか？』

ネイチャーが慌ててでてきてウォーロックに聞く

ウォーロックはネイチャーの耳元、って言うか頭の横でささやく、
耳は無いからねネイチャーは。

『えっ！それってやっちゃいけないんじゃない？』

『バカヤロー！そんなこと言ったらできねえよ！』

大声を出したネイチャーの頭を容赦なく叩くウォーロック

『ウォーロック、ひどいです』

といてネイチャーはスマレの端末の中に入っていた

「電波変換、灯軒スマレ、オン、エア」

と、恥ずかしいのか、小さな声で言いながら右手を上げる

「・・・」

「ちょっと、ソ」

虚しい沈黙を破って、真っ赤になった顔で何かを言おうとしたスマレが口を閉じた

スマレの端末から合成音声の音が、ここから途切れ途切れに聞こえる

『何かアクセスコードが103だと言ってました』

ネイチャーが現れて言った

『サテラポリスに登録されるんだっとな、忘れてたぜ』

ウォーロックが悪びれる様子もなく平然と言った。スマレが出しているオーラを見ればそんなこと言えないと思うのだが

「まあいいや、ネイチャー、電波変換」

スマレが投げやりに言うと

茶色の光に包まれ、スマレの姿が変わった

茶色と緑を基調としたスタイルになって、何故か髪型がストレートのロングになっていた

顔をみると地味な色にもかかわらずスマレの顔がかわいく見えた全体を見るとひざほどのロングコートを着ているような格好だった

「どっ？似合ってる？」

スマレが上目遣いで聞いてきた

正直に言おう

はつきり言っただけかなり似合っていてかわいかった

僕は上目遣いで聞かれた瞬間、スマレに見惚れていて、現状認識が出来なかった

「ねえ？似合ってる？」

今度は自分の格好を見ながら近づいて聞いてきた

「すごく、かわいいよ」

正常に機能していない脳が口走った言葉

スマレ、今の言葉は忘れてくれ、幻聴なんだ、電波変換したせいで

変な言葉が聞こえただけで、僕は言ってます
と心の中で百万回唱える

「なに、その棒読み口調、ひどい」

口走った言葉が棒読み口調であったことに神に感謝する
僕は、いまさら顔が赤くなるのを感じて下を向く

「何で、髪が長いんだ？」

「本当だ、なんで髪が長いんだろ？」

下を向いてるので分からないが、スマレは髪をいじっているらしい

「ソラ、どうして下向いてるの？」

そう言われて、勇気を出してスマレを見る

スマレは電波変換を解いていた

僕はスマレの顔をじっと見る

「なによ？」

スマレが怪訝そうな顔をする

何年ぶりに幼馴染の顔をまともに見た

勝気そうな顔にショートヘア

こんなにスマレはかわいかったのか？

実際に言ったら、一瞬で張り倒されるであろう言葉が心に浮かぶ

「ロングのほうが似合ってるよ」

これまた口走ってしまい、後悔の念が心に浮かぶ、
スマレは視線をそらした後、口がもぞもぞと動いた
スマレの顔を見つめていたら、また顔が赤くなるのを感じて後ろを
向く

「もう帰る、じゃあ、明日」

とって、電波変換をしてウェーブロードに上がる

『明日は日曜日です』

ソラが見えなくなっしてからネイチャーが言った

電波変換（後書き）

ながながとすいません

約束しましょう、次は短くまとめます（そういつて過去に何度も約束を破っている奴）

あと、感想待ってます

ネイチャー・バイオレット(前書き)

約束守れませんでした

だけど次こそは！(どうせまた上の文を書くんだったらうっなあ)

ネイチャー・バイオレット

『ソラ、顔が赤い』

ウェーブロードを通っているとウォーロックが言った
僕は動揺を悟られないように気をつけて言った

「ただ夕日が赤いから反射してるだけだよ」

僕が言うとウォーロックはおかしそうに

『いまじゃねえ、さっきだ。よかつたな、スマレが鈍感で』

僕はウォーロックに言われて観念した

「顔って赤かったの？」

『ああ、赤かったぜ、夕日みたいに』

「おっは、ソラ」

その時、スマレの声が聞こえた

僕は驚いて、声がした方向を見ると、電波変換したスマレが横にいた

「ああ、スマレか」

「ああ、スマレかって、他に言うことはないの？それに今の私は、
ネイチャー・バイオレットだから、変身してる時はそう呼びなさい

よ

「ネイチャー・バイオレット?」

僕が聞くと説明してくれた

「ネイチャーは分かるだろうけど、スミレを英語で言うとバイオレットだから、ネイチャー・バイオレット」

「今考えたのか?」

僕が聞くと、スミレは誇らしそうな顔をした

「ソラが帰ってからすぐ考えたんだから、すごくない?」

「まあ、確かに」

僕はすごいと思ったのだが、何故か感情がこめずに言った

「もうちょっと反応しなさいよ」

僕はスミレが笑いながら言うのを聞きながらスミレの家の上まで来た

「電波変換できるなら、わたしも戦えるよね?」

自分の家を見ながらスミレが言った

スミレが言ったとき、僕は気付いた、電波変換ができるということ
は、戦わなくてはいけないということを

「でも、お前が戦う必要は無いよ」

僕は冷たく言った

「わたしは弱いってこと？戦ってもいないのに、そういうことわ
ないでくれない」

スマレが怒って言った

「そういう意味じゃない」

スマレが傷ついてほしくないから といいかけた口を閉じる
何を言おうか迷っていると、いきなりスマレが左腕を剣に変えた

「そんなにわたしが弱いって言うなら、戦ってから言えよ」

スマレがうつむきながら低い声で言った

「おい、スマレどうしたんだよ？」

スマレが左腕を剣に変えて構えたので、僕も構えながら聞く
言い終わったときスマレが突っ込んできた

「くっ！バトルカードエレキスラッシュュ！」

スマレの剣をよけながら左腕を電気をまとった剣に変える
エレキスラッシュにしたのは、スマレが見た感じ木属性だと思った
ので弱点ではないカードを選んだ為だ

スマレと剣を交えて一分ほど、僕はスマレを攻撃せずに防御に徹した
スマレは急に後ろに飛びのくと左腕を僕のほうに向けた

「ウッドウェーブ！」

スマレの左腕から伸びてきた木が僕に向かってくる

「バトルカード！ダバフレイム！」

左腕を火炎放射器に変えて、向かってきた木を焼き尽くす

『ソラ！そんなことしてたら、一生終わらねえぞ』

ウォーロックが一瞬の静けさのうちに言った

「攻撃したら、スマレが

そこまで言ったときスマレが左腕を剣に変えて、また突っ込んできた
ゴメン、スマレ、と心の中で言ったあと叫ぶ

「バトルカード！ファイアスラッシュ！」

スマレが斬りかかってきて、刃を交えながらスマレの隙について脇
を斬る

「くっ！」

スマレがひざから崩れ落ちて脇を手で押さえる

「スマレ・・・」

「ソラからしたら弱いかもしれないけど、逃げ回るよりかはましだから、ソラがなんて言っても戦うから」

僕を見上げるとスマイレが言った

「スマイレ……」

スマイレは立ち上がるとウェーブロードを降りて家に帰っていった

ネイチャー・バイオレット（後書き）

新しい仲間が登場と思ったらすぐ戦うっておかしいですよ
これでスミレの性格が少し分かっていただけると嬉しいですけど
戦闘描写分かりやすかったですでしょうか？

それぞれの思い（前書き）

お久しぶりです！

短い・・・のかな？

文字数見るの忘れたので分かりません

それぞれの思い

（TKタワー）

「どんなけ・・・いるんだよ」

僕は実体化したウイルスと戦いながらつぶやく

何体倒してもいつこうにウイルスの数が減らない

さいわい弱いウイルスなので大怪我はしていないが少しずつ攻撃を喰らっているせいで徐々に体力が失われていく

最近、ウイルスの実体化が頻発していて電波人間はかなり忙しい

「隙だらけだぞ、ロックマンジュニア！」

後ろで声がして振り向くと、スミレとTKタワーに行った日、TKタワーの前で戦っていた電波人間が僕を攻撃しようとしていたウイルスをデリートした所だった

「ジュニアはいりません」

僕はぶぜんとして答える

理由はジュニアと呼ばれたことだ、親と比較されたくは無い。

今はスミレとケンカしてから一週間、学校でも口をきいていない

『ソラ、メールだ』

ロックが急に言った

「だれから？」

ウィルスと戦いながら手短に聞く

『スマレからだ』

僕は読み終わった後、スピカモールにむかった

「どこへ行く！？ジュニア！」

後ろで声が聞こえた

くスピカモールく

「どんなけ・・・いるのよ」

スマレはウィルスと戦いながら、やけくそ気味につぶやく

『スマレ、ソラを呼んだほうがいいんじゃないですか？』

「呼ばなくていい」

不安そうに言ったネイチャーの提案をきっぱりと否定する

ソラとケンカしてから一週間、ソラとは一言も口をきいていない
一週間前、ソラが言ったことは、お前は弱いつていう意味で言った
訳ではないということ、スマレにも分かっている

「戦う必要は無いよ」ソラが言った言葉だ、それは、スマレは電波

変換できるようになったのに、自分のように戦わずに逃げている、
という意味で言ったように聞こえる

ソラが電波変換できる、ということとはスマイレにも、うすうす感じて
いた。

だからこそソラが電波変換できるということを確信したとき嫉妬し、
その後、自分も電波変換できるようになったと知ったとき、ソラと
いっしょに戦えると思い、喜びを感じた・・・なのにソラはスマイレ
の気持ちなど知らずに、スマイレの力なんか要らない、というような
ことを言ったとき、ソラに自分の実力を見せ、自分は弱くないとい
うことを証明しようとソラと戦った・・・結局負けてしまったが

スマイレは目の前に現れたウイルスを必要以上に力を入れて、たたき
切った

その時、周りにいたウィルスが上からの攻撃で燃えてデリートされた
仲間かと思いい見上げると左腕に炎をまとっている紅い電波人間がお
り、口を開いた

「よお、ロックマン」

(なに言ってるのこいつ?)

スマイレとネイチャーが心の中で突っ込んだ

それぞれの思い（後書き）

感想待ってます！

新たな敵（前書き）

短いですよ

新たな敵

一瞬でウイルスを倒した電波人間は飛び降りてスマイレの前に立った。紅いアーマーに左腕にまとった炎が何より自分が炎使いということを表している。

「こんなウイルスにてこずっているのが、世界を救ったヒーローかよ、がっかりさせ」

そこまで言ってスマイレの姿を見て口が止まる。

「お前ってロックマンか？」

あっけに取られていたスマイレだが首を横に振る。それを見た電波人間は手で額をパチンと打った後、自分の姿を見てわざとらしく驚く。

「アチャー、人違いかよー、うわっ！ 恥ずかしくて体が赤くなっちゃった！」

(もともと赤いだろ)

心の中で突っ込むスマイレとネイチャー。言い終わって静寂の中、紅い電波体はなぜか期待のままざしでスマイレを見ていた。

「バカヤロー！ 突っ込めよ！ 絶対、今突っ込んだら、もともと赤いだろって！」

赤い電波体が叫んだ

赤い電波体の期待のまなざしの意味がわかってスマレはあきれた

「もともと赤いだろ」

完全に棒読み口調のスマレ

それを聞いた電波体の左腕にまとっている炎が強くなった

「コツ、コノヤロー、ここまでバカにされたのは初めてだ、本当はロツクマンと戦いたかったが、てめえを黒焦げにしてからだ」

スマレは話が読めなかったが紅い電波体が戦闘体勢に入ったのでスマレも構える

『スマレ、ソラをもう呼びました』

「そんなことしなくていいって言ったでしょ」

ネイチャーがささやいてきて、スマレはその内容に怒る

『スマレは疲れているし、確実にあいつはスマレより強いですが、それにあいつは炎属性、圧倒的に不利です』

ネイチャーが言ったことはごもつともだったので、黙って紅い電波体に集中する

「十二神が一人、サラマンダー様に黒焦げにされることを光栄に思いな！」

新たな敵（後書き）

うーん、最後の言葉、導入部分がそこしかなかったの・・・多少
変ですが

ともかく、新しい敵が出てきました！
感想待ってます！

仲間（前書き）

サブタイトルなかなか思いつきません

仲間

「タコヤローども！邪魔だー！」

僕はウェーブロードを突っ走っりながら叫び、目の前に現れるウィルスウェーブロードから叩き落す

今、記録をはかったら世界記録なのは間違いないだろう
ネイチャーからのメールをもらってから1分、僕の頭にあることは
スマレの元へ行く、ただそれだけだった。

ウェーブロードを突っ走っているときピカモールが見え、ウェーブ
ロードから飛び降りてスマレの周波数があるところに向かう
スマレの周波数が近づきイベント会場にいくと、スマレは膝を着い
ていて、スマレの視線の先には紅い電波体が攻撃をしようとしていた

「スマレ!!!」

僕は叫びながらスマレと紅い電波体の間に入った

そのとき、紅い電波体の左腕から大きな炎があふれ、僕に直撃した

さっきの攻撃を受けたせいでスマレの足は動かなかった

もう死ぬのかもしれない

そう思うとスマレは一週間口を聞いていないソラのことを思いだ
していた

ソラに謝れなかった。

ごめん、ソラ

敵の電波体が炎を放ち、炎がこちらに向かってくる
そのとき、自分の名前を呼ぶ声がして顔を上げると、倒れたソラの
姿があった

「ソラ！」

スマレは懸命に足を動かして、倒れたソラの元へ行く
ソラのすぐそばに腰を下ろしソラを抱き上げると、ソラは目をつむ
っていた。

呼吸はあるようなので、電波変換が解け、気絶しているだけらしい
「こいつがロックマンの正体か？まだガキなのか？まっ、オレの
炎の直撃してデリートされ無いだけましたな」

サラマンダーと名乗る紅い電波体が陽気に言った
しかし、次の瞬間には明らかに不機嫌そうな声を出した

「ロックマンと一騎打ちしようとしたのにこんなにあつけないとわ
な。がっかりだぜ」

言い終わったあと、左腕の炎が強くなり、攻撃態勢に入る

「ロックマンといっしょにお前も灰にしてやらあー！」

サラマンダーは左腕をこちらに向け、さっきの炎より格段に大きい
炎がスマレ達を飲み込もうとした

スマレは電波変換の解けたソラを抱きしめて自分達を飲み込もうと
する炎から背を向け、ソラを守ろうとした

攻撃を喰らうと思い、スマレは身構えていたが来ると思ったタイミ

ングに炎が来ない
不思議に思ったスマレは振り向こうとした
その瞬間、背中が熱くなった

仲間（後書き）

駄文すいません

活動報告読んでくださっている方は知っているとありますがこの話に出てくる携帯端末名前が思いつきません
携帯端末って打つたびにモヤモヤとした気持ちになります

仲間 + 1 (前書き)

駄文・・・たぶん(笑)

仲間 + 1

サラマンダーは自分の目を疑った

あの二人組みがまだ生きている

二人とも気絶しているようだが、死んでいるようには見えない
自分の攻撃は人間が喰らって生きていれるようなものではない、ぼ
ろぼろだった女の電波人間もデリートされていないことが不思議だ

「さすがに全部は防げなかったか」

上から声が聞こえ見上げると、黒いとんがり帽子に黒いマントの、
ほぼ全身黒づくめの電波人間がいるのが見えた、帽子からはみ出し
ている紺に近い蒼い髪の毛が左目を隠している

「・・・」

「・・・」

にらみ合う二人、しかし流れている陽気な音楽が緊迫した空気をぶ
ち壊しにしている

「俺の名前はレイ・ブラック！」

突如口を開け、大声で名乗る黒い電波体

サラマンダーは何も言わない

陽気な音楽だけが流れている

「普通聞くだろ？何者だ？つて？」

陽気な声でレイ・ブラックは紅い電波体に聞く

「いきなり現れてごちゃごちゃうるせえんだよ！このハイテンション野郎！」

スマレに突っ込みを要求した自分の行動を棚に上げて叫ぶサラマンダー

「灰にしてやらッ・・・ぐっ！」

攻撃態勢に入ったとき、突如、膝を着き、苦しみだすサラマンダー

「ちっ！よかったトおも・・・エ、灰にさレ・・・なくテ、済んだ・・・んだからナ」

立ち上がり、そっぴい残すとサラマンダーは消えていった

「なんだったたんだ、あいつは？」

レイ・ブラックはつぶやいた

仲間 + 1 (後書き)

おひさしぶりです

新しい仲間でできましたね、オリキャラもう一人ぐらい出すつもりです

名前は・・・他の方が書いていらっしやる小説にも名前の一部がでています

目を開けるとそこは・・・(前書き)

タイトルと内容、あってません。
駄文です

目を開けるとそこは・・・

スミレは夢を見ていた
夢の内容は・・・言わないほうがいいだろう。乙女の秘密というものである

スミレは目を開けて起き上がるとソラの姿があった

「ソラ！」

ソラの肩が跳ね上がり、こちらを向いた

「スミレ、だいじょうぶか？」

ソラの少し心配そうな声

ソラの言葉を聞きながら周りを見渡す

どうやらここはソラの部屋らしい、推理小説やら冒険小説やらがあちこちに散らかっている

部屋の隅っこに体育座りをした紺色の髪の毛の中学生くらいの少年とその肩の上に黒いマントを着た幽霊のような電波体がこちらを見ていた

「ああ、この人が助けてくれたらしいよ」

スミレの視線にきづいたソラが説明する

ソラの知り合いではないらしい

「黒井ユウキって言うんだ。よろしく」

体育座りのまま片手を上げるユウキ

ユウキは肩の電波体といっしょにニヤニヤ笑いながらいった

「ソラ、スマレが守ってくれなかったら今頃死んでたぞ、スマレが守ってくれたおかげで、そう、スマレが守ってくれたおかげで」

スマレが守つてを強調して言いまくるユウキ、こいつ、見てやがったのか。心の中でつぶやくスマレ
ソラを抱きしめた感触がよみがえってきて身体が熱くなった

「スマレが守つて ぐはっ！」

言い続けていたユウキの隣にネイチャーが現れてユウキの顔面をなぐった、ユウキは肩の電波体といっしょに倒れる
ソラを見ると事情が飲み込めていないようだ

「スマレ、どういう意味なんだ？」

「帰るよ」

ソラの質問を無視して立ち上がり、部屋を出て玄関に向かう、復活したユウキも玄関に向かう

「じゃあ、がんばれよ。二人とも」

ユウキが靴を先にはき終わった後、言った

スマレはユウキ言いたい事がわかり、睨んだ

ユウキはスマレの視線を受け流して電波変換をする

黒い光に包まれた後黒いマントに黒い帽子をかぶった人影が一瞬見えた後、消えていった

ユウキがいなくなった後ソラを見たが無表情だった。ユウキの言った意味が分からなかったのだろうとスマレは判断する
スマレは靴をはき始める

「じゃあ、また明日」

靴をはき終えた後、ソラと目が合うとソラが微笑んで言った
ソラと目が合った瞬間、スマレは自分の気持ちの何かが変わるのを感じた

スマレはそれに何とか答え、玄関のドアを開けてソラの家から出た。
赤くなつた顔を見られないように。

目を開けるとそこは・・・(後書き)

感想お待ちしております

すがすがしい朝？（前書き）

おひさしぶりです

一週間以上空いてしまいました

すいません。読んでくれる人がいるといいですけどね

すがすがしい朝？

黒井ユウキ君に会ってから一週間がたった

このごろ世界中でかなりの電波障害が発生している

強化ウィルスが主な原因で、ゴーレムとか言う電波体を使うやつらは最近見かけていない

ともかく強化ウィルスのせいでサテラポリスの人達は忙しいようだ
僕も一応サテラポリスの一員なんだけど、学校があり、家庭がありと、そっちのほうも忙しいので、あまり戦ってはいない

でも、二日に一回は戦っているのでウォーロックは、この頃ご機嫌だ
他の電波人間といっしょに戦うことは少なく、この一ヶ月で片手で数えられるほどだ

「最近、なんで電波ウィルスが大量発生しているんだろう？」

僕は横にいるウォーロックに意見を聞く。たいして期待しているわけではないが

『さあな、ウィルスのほとんどが、人工的に作られたウィルスなん
だろ？暇な奴らもいるもんだ』

予想通りの返答。少しでも期待をした僕がバカだったと、心の中でつぶやく

空気は少し湿っているが、冷たく、息を吸った時に肺の中が新しくなっ
ていくのを感じる

なぜなら今は朝の6時、たいていの人間は家の中にいる時刻だ
見かけるのはおじいさんやおばあさんといった、おーるどぴーぶる

と呼ばれる人達だ

その時、すがすがしい朝に似合わない無感動な音がした

『メールだぜ』

「分かってるって」

僕はメールを見る。そこにはすがすがしい朝を邪魔する内容だった

ナンゴヤで電波障害が発生、原因は電波人間、サテラポリス特別隊員は早急の事態の鎮圧を要求する

短いのになかなかショッキングな、内容じゃないか

今まで、電波人間が犯罪を犯したことはあまりない。それに僕は電波人間と戦ったことなんてスマレとしかないので、経験不足だし、人と戦うことはあまりしたくない

『ソラ！いくぞ！久しぶりにウイルス以外と戦えるぜ！』

ウォーロックが叫ぶ

僕は行きたくはなかったのだが、ウォーロックに押し切られる形で行くことになった

銀色の騎士（前書き）

駄文ですいません

銀色の騎士

電波変換をして、ウエーブロードに上がってから気付いた

今日は火曜日、学校がある日だ

どうせ、ついた頃には終わっているだろうと思ったが、ナンゴヤについたときにはその気持ちも吹っ飛んだ

朝から目覚めて間もない高いビル群、その一つのビルから煙が上がっていた

そのビルに近づく途中、一つのビルの屋上から爆発音がして煙が上がった

僕は爆発の起きたビルの屋上に降りる

小規模な爆発なのでビルに穴は開いていないが、屋上の床がえぐれている

『まだいるのか』

煙の中から威厳のある低い声がした

煙から、電波人間が出てきた

出てきた電波人間は銀色に光る鎧、剣、盾といった、西洋の騎士の姿をしている

煙が晴れると後ろに倒れた電波人間が見えた

『こいつはかなり強えぞ』

ウォーロックがかすれた声で言った

ウォーロックの言うように、銀色の騎士からはかなり強い電波が発せられている

「何が目的だ！」

ぼくは、恐れているのを知られないように、大声で言った

『抵抗しなければ、お前を傷つけない』

銀色の騎士は静かに言った

「質問に答えろ！何が目的だ！」

僕の質問がスルーされたのでもう一度聞く

しかし、銀色の騎士は答えず、周りを見渡した

その時、僕は銀色の騎士とは違う強い電波が近づいてくるのに気付いた

『もう一体かなり強い奴が来てる』

ウォーロックが言った瞬間、銀色の騎士が消えた

『追うぞソラ！』

ウォーロックが叫ぶ、僕は銀色の騎士の電波を追った

銀色の騎士は、ウェーブロードを進んでいる。僕が追いかけていくと、真正面から白い光を放つ電波が近づいてきた

銀色の騎士は急に立ち止まると振り返った、僕も銀色の騎士と一定の距離を保って立ち止まる

銀色の騎士は左手で持った剣をこちらに向けた、剣から白い光が現れ、僕の方向に一直線に向かってきた

とっさのことで、僕は反応が来ず、胸に白い光が直撃した

胸が焼けるような痛み、僕はウエーブロードから弾き飛ばされ、下に落ちていった

銀色の騎士（後書き）

感想待ってます

騎士と天使（前書き）

突飛ですね

まあ、スバルの話じゃないので当然かもしれませんが

騎士と天使

「ミカエルよ、待っていたぞ」

銀色の騎士は、目の前に来た電波体に言った
目の前の電波体は、白一色で、肩から足首辺りまで白い衣で覆われている

さつき、自分を追ってきた青い電波人間は、ウェーブロードから落ちていき、行方は分からない

『・・・』

ミカエルは答ええない。というより答えれない

銀色の騎士の目の前にいる強力な電波体の名前はミカエル・ライト人間の手によって作られた完全な戦闘型電波体であり、もともと、声を出すことが出来ない

ミカエル・ライトは非常に強力なため、もし暴走しても被害を最小限に抑えるために、ウェーブロードから降りることを許されなかったそれはまるで、天に住む天使のように

「我が君が、そなたを仲間に取り入れたいと望んでいる」

銀色の騎士は、無駄を承知で説得しようとする

なぜなら、ミカエルは意思を持たない電波体だからだ

ミカエルは当然答えず、銀色の騎士に接近して、右手に現れた白い剣を銀色の騎士に振るう

突然の奇襲で驚く銀色の騎士だったが、すぐに右手の盾で受け止める

奇襲を防がれたミカエルは後ろに飛びのき、次の攻撃の体勢にはいる銀色の騎士はミカエルの後ろに現れ、横に剣を振るう

騎士の剣が、ミカエルの衣に当たったとたん、剣がはじかれたミカエルは反応できなかつたが、攻撃に気付き、振り返りながら、剣をはじかれて隙だらけの騎士に左手から光を放つ

攻撃を喰らった騎士は吹き飛ばされる

ミカエルは追撃しようとして、騎士を追った

吹き飛ばされながら、騎士は体勢を立て直し、右手の盾を、向かってくるミカエルに投げつける

ミカエルは飛んできた盾を剣で軽々とはじき、着地した騎士に向かつて走る

「光よ！」

いきなり、騎士が剣を空に向かって突き出す

『！ー！』

ミカエルは突然、光に包まれ、痛みで動きが取れなくなった

ミカエルは自分を包んでいる光は、空に浮かんでいる騎士の盾から出ているのを確認した

動けないミカエルに向かって、騎士は光を出している剣を向ける

剣の光がミカエルに向かって進んでくる

ミカエルは防ぐすべもなく攻撃を喰らった

最後にミカエルが感じたのは、斬られたような二つの痛み

騎士と天使（後書き）

戦闘描写、分かりやすかったでしょうか
僕としては、長かったような気がしましたが（だったら直せよ）
感想お待ちしております

圧倒的な力（前書き）

遅くなりました

これからは一週間に一話という遅筆になると思います

圧倒的な力

「ここはどこだ？」

目を開けて、僕はひとりつぶやく

『ウェーブロードから落ちたんだ』

そばにいる一体が言った

「分かってるよ、ロック。ここはどこだ、って聞いたんだよ」

立ち上がるうとすると、体に痛みが走った

僕はリカバリーを使って回復する

どうやら僕は、ビルとビルの間に着いたらしい

上を見ると、ビルに切り取られた空が見える

「そつえば、さっきの電波人間は？」

僕はウォーロックにたずねる

『わからねえ。ともかく、追ったほうがいいだろう。まだ近くに
いる』

ウェーブロードに上がると、あの銀色の騎士が立っていた

そばには、二つの大きな切り傷がある白い大きな電波体が倒れている
白い電波体には見覚えがある

ミカエル・ライト、WAXAワックスが開発した最強の電波体だ

ミカエルは、電波人間4人と戦ってやっと倒せると聞いている。だ
けど、目の前の銀色の騎士はたった一人で倒したのだろうか

銀色の騎士は、ミカエルに手をかざし、手のひらから黒い球体を出
した

黒い球体はミカエルの身体に吸い込まれた

数秒の間、異常は起きなかったが、突然ミカエルは苦しみ始めた
声は聞こえないが動作からして苦しんでいるのが分かる

「何をしているんだ！」

僕は背を向けている銀色の騎士に大声で問う

「抵抗すると、痛い目にあうぞ。さっさと帰ったほうがいい」

背を向けたまま静かに言う銀色の騎士

ミカエルはまだ、もだえ苦しんでいる

僕は不意打ちをしようと、左手をブレイクサーベルに変えた

跳んで、一気に銀色の騎士との距離を縮め、脳天をかち割るために
振り下ろす

「抵抗するなと言っただろう」

いつの間にか銀色の騎士は、僕の攻撃を盾で受け止めていた

僕は攻撃を受け止められ、距離を置こうと後ろに下がった

銀色の騎士は、超人的な速さで距離を縮め、横に剣を振る

かろうじて受け止めた僕は、勝ち目がないことを悟った

（くそ！攻撃が重すぎる！）

そして、僕はあっけなく敗れた

あばらを切るうとした剣筋は騎士の剣に叩き落され。僕は膝をつく

「くそ！」

僕は再度、騎士に切りかかるうとするが、あっけなくかわされ、肩から斬られた

「くっ！」

たった一撃だが焼け付くように痛く、立ち上がれそうにない。

「命だけは助けてやる」

騎士は静かに言った

その時、ふらふらとミカエルが立ち上がった

「やっと終わったか」

騎士が振り返って言った

ミカエルは立ち上がったが、いつ倒れてもおかしくない立ち方だった

「まだ、実用段階ではないようだ」

どこからともなく画面が宙に現れ、人の声が聞こえた

騎士は画面のほうを見た

「一度連れて帰って来い。そのままでは戦えそうにないからな」

騎士は軽く一礼した

「そこに倒れているのは、ロックマンではないか？」

画面の声の主が僕に気付いたようだ。明らかに馬鹿にした口調で言っている

にらんでやりたかったが、あいにく、そんな元気はない

「地球を救った古きヒーローは時代に乗り遅れているようだな、お前程度に負けているようでは」

救ったのはオレじゃない、父さんだ。と心の中でつぶやく

「どづいたしましょう？」

騎士が礼儀正しく聞く

「放っておけ、たいした害にならん。それに特別な人間はこれからの時代には必要だからな」

「わかりました」

その声を聞いたとき、僕の視界が白くなった

圧倒的な力（後書き）

文章分かりづらいですよね
感想待ってます

オレンジ色のスナック菓子（前書き）

これは次につなぐための話です

オレンジ色のスナック菓子

男は考えていた

男の左手は無意識にデスクの左手後方にある色彩豊かな袋が多数ある山に手を伸ばし、その山にある袋をつかんで、両手を使ってあげるあけた瞬間、オレンジ色の粉が少量デスクにこぼれ落ちる

そして男は、袋から出てきた真ん中に穴の開いたオレンジ色の棒を口に運ぶ

男が口を閉じると、シャリツという音と共に口の中に旨みが広がるそして、連続で口を閉じては開け、このシャリシャリという音と旨みを味わう

すでに男の頭の中には考えていたことはすでに忘れ去り、棒を口に運ぶ機械と化していた

「暁さん」

その声で機械化していた脳が元にもどった

「なんだ？」

暁と呼ばれた男は振り向く、そこには自分の部下がオレンジ色のスナック菓子を不審そうな目で見ていた

「ミカエル・ライトの件ですが、どうしましょう？」

部下は気を取り直して言う

「ああ、そうだな」

暁は相槌を打つ

ミカエル・ライトはつい今しがた、敵と思われる電波人間に連れ去られたという報告が入った

ミカエルが負けることはあつてはならないことだが、デリートされたほうがまだよかった。敵に連れ去られるという事は、改造されコピーされることもありうる。一体だけでも危険なのに、それが何体もいては今の電波人間だけでは勝てる見込みはない

それに、ミカエルを倒したという電波人間はたった一人だという報告も入っている。電波人間四人以上の力を持つ電波人間はサテラポリスでは確認されていない

「ミカエルを倒したという電波人間は本当に一人なのか？」

暁はどうしても信じれないので部下に聞く

「周波数を調べても、ミカエルを連れ去った人物は一人ということに間違いありません」

「追跡はしたか？」

「途中で追跡不可能となりましたが、時間はかかるが、向かった先の特定はできるとの事です」

暁は食べかけのスナック菓子を口に放り込む

「そうか、急いで特定してくれ」

そう言つて暁は新しい袋に手を伸ばした

オレンジ色のスナック菓子（後書き）

暁が出てきました

3では一応生き残ってたんですね

エンディングを見る限り

暁とアシッド(前書き)

自己目標過ぎた上に駄文

暁とアシッド

僕はウェーブロードで気絶しているところをサテラポリスの人に発見された

この場所はWAXA日本支部。事情聴取を受け終わって、帰るところだ

「災難だったな」

後ろから声が聞こえ、振り向く

暁さんが、手にうまい棒を持ってこちらに歩いてくる

「暁さん、お久しぶりです」

「ちょっと見ないうちに大きくなったな、ソラ」

暁シドウ。細かい階級は知らないけど。ともかく、サテラポリスでは偉い人らしい

歳は五十歳ぐらいらしいけど、四十歳ぐらいに見える少しおちゃらけた紳士だ（意味が分からん）

父さんが暁さんの知り合いらしく。僕が小さいときから知っているらしい

暁さんは、僕の記憶の中ではいつもうまい棒を必ず手に持っている

『お怪我は大丈夫ですか？』

暁さんのウィザード、アシッドが僕に聞く

アシッドは、白いボディの下半身のない犬型ウィザードだ

「ええ、まあ、大丈夫です」

僕があわてて言うと、ウォーロックが現れた

『ソラ！何でこいつなんか敬語になつてんだ！？』

「だって、俺より長く生きているだろうし」

ウォーロックを見て言った

『オレだって、お前なんかより長く生きてんだよ！それに、オレは白チワワよりぜってえ、長く生きてるぜ！』

白チワワ？アシッドのことか？

『にしては、単純ですね。ウォーロック』

憎まれ口を叩くアシッド

それを聞いたウォーロックはアシッドに跳びかかった

「ワイザード、オフ！」

アシッドに切り裂くすんでのところでウォーロックが消える
ウォーロックの音が携帯端末から聞こえる

『ソラ、てめえ、なにしゃがる！ズタズタにするところだったんだぞ！』

『消えてよかったですね。逆にズタズタにしてみましたよ』

まだ憎まれ口を叩くアシッド

暁さんの携帯端末が鳴った。電話らしく、一言三言話した後、ウォーロックに憎まれ口を叩き続けているアシッドに言った

「お呼びだ、アシッド。行くぞ」

暁さんに言われ、憎まれ口を叩くのをやめたアシッド

「じゃあな、ソラ」

暁さんが言って建物の中に入っていった

「ロックって、何歳？」

ウォーロックに僕は聞いた

『詳しくは分かんねえけど、スバルより長く生きてるぜ』

アシッドの言うとおり、何で、いまだに単純なんだろうか
約四十歳というのに言動は不良の中学生じゃないか

助けを呼ぶ声（前書き）

もともとつまらないのが、もっとつまらなくなってきている

助けを呼ぶ声

平和

心配、もめごとがなく和やかな状態

そんな時は来るのだろうか

悩みが一つもない日は来るのだろうか

僕は平和なんてありえないと答えれる

どんなに平和に見えても、絶対に考えることはある。どんなにくだらなくても

考えることがいっぱい、精神的に平和な日は訪れない

現代、戦争はないが、個人的な戦争はある。幼稚園児がスコップの取り合い、それは、当事者にとっては戦争だろう

これは個人的な戦争なのだろうか・・・それとも、世界的な戦争？
・

120

この前のミカエル拉致事件から数日後。ミカエル事件の時、気絶をし、その後サテラポリスに事情聴取を受けたので学校を休んでしまった

今は家で読書中だ

携帯端末が鳴る。表示を見るとスマレからだった

そういえば、スミレはこの頃冷たい

「はい、なにか？」

嬉しかったのだが、気付かれないよう、ポーカーフェイスを作って
電話に出る

画面に現れた像を見ると、なぜか、スミレは電波変換した状態だった

「ソラ、来てくれない？」

スミレは息が荒く、フラフラの状態だった

「は？」

僕は口を開けた

「メール見てないの？早く来なさいよ」

そこまでスミレが言ったとき、後ろで赤い服を着た人間が画面の端
に映った、光り輝いたかと思うと倒れた

「何をしてるんだ？」

予想できたのだが、念のために聞く

「すごく強い電波人間が現れたんだよ！早く来て！」

スミレの声は後半はヒステリックになっていた

そのときスミレの後ろに見覚えのある銀色の騎士の姿が見えた。そ
の瞬間、通信が切れた

「スミレ！」

僕は呼びかけるが、当然返事は返ってこない

「ロック！」

僕は近くにいるはずのウォーロックを呼ぶ

『あん？』

平和そうな声。ウォーロックは、寝転んで本を読んでいた
事情を説明するとウォーロックは本を投げ捨てる

『よしやあ！行くぞ！ソラ！電波変換だ！』

「分かってる！電波変換！星河ソラ！オン・エア！」

助けを呼ぶ声（後書き）

駄文で涙が出そうです
感想待ってます

ナンゴヤの戦い 士気を高めよ！編（前書き）

タイトルのセンスないですね
小説のセンス以上に

ナンゴヤの戦い 士気を高めよ！編

メールを読むと、謎の電波人間がナンゴヤで破壊活動をしているらしい

僕はナンゴヤに向かって、ウェーブロードを駆け抜ける

ナンゴヤのビル郡が見えるようになると、あの銀色の騎士の強力な電波を体で感じる

『あいつだけか』

ウォーロックの言うとおり、強力な電波はあの騎士しか感じない
ネイチャー・バイオレットの電波のほかにも、数人の電波人間の気配を弱々しく感じる

「あいつが一番弱いって、リーダーらしき人が言ってたよね」

僕は、ミカエルの事件で、気絶する寸前に聞いた声を思い出す

『ああ。おそらく、スマレと戦った電波人間も銀色の騎士の仲間だろう』

ウォーロックは、紅い電波体、サラマンダーのことを言っているのだろう

疲れていたとはいえ、一撃で電波変換が解けるといいうのは、脅威だ
そして、銀色の騎士、互角に勝負もできなかった

恐ろしさで、僕の体は一瞬震えた

『どんなに相手が強かったって、逃げるよりましだ』

ウォーロックがつぶやく
僕は気持ちを切り替える

「そうだね、守らなくちゃいけないから」

僕はネイチャー・バイオレット スミレの顔を思い出す

あのリーダーらしき人は、電波変換ができる人間は殺す気はなさそうだが、安心はできない

銀色の騎士の気配がするビルの真上まで来るとウェーブロードから飛び降りた

ナンゴヤの戦い 士気を高めよ！編（後書き）

十二神って多すぎた！
名前全然考えてない

ナンゴヤの戦い 敵の目的！編（前書き）

だらだらと長い

ナンゴヤの戦い 敵の目的！編

「お前はなぜ戦う？」

銀色の騎士が問う

「んなもん、てめえに教えねえよ」

レイ・ブラックが構えながら答える。レイ・ブラックはところどころ怪我をしている

一緒に戦っていた電波人間、ネイチャー・バイオレットや、名前の知らない4人の電波人間は銀色の騎士に攻撃を受け、倒れている残っているのはレイ・ブラックのみだ

銀色の騎士はさすがに疲れている様子を隠せない

「お前たちは戦わないほうが身のためだ」

「なんでだよ？」

「お前たちのような、特別な人間は、新世界にとって必要だと、我が君は言っておられる」

「けっ、我が君って、てめえの意見じゃねえのか？」

レイ・ブラックは疑問を口にする

「私は我が君に忠誠を誓った身、我が君の命に疑問を持つことはない。ただ、言われたことをこなすだけだ」

「その言い方だと、てめえは、主人の命令を疑問に思ってるじゃねえのか？」

「我が正義を貫くには、私は弱すぎる。だからこそ、強き者に従い、その中で我が正義を貫き通す」

騎士の返答を聞いてレイ・ブラックはあざ笑う

「そんなもん、正義を貫き通すっていわねえよ。正義を貫き通すって言うんだったら、立ち向かってくもんだぜ」

騎士は剣を構える

「もうおしゃべりはいいだろう」

時間稼ぎもここまでか、とレイ・ブラックは考える

相手を倒すことは、おそらく自分ひとりでは不可能だ。自分達の仲間が来ることを期待していたが来る気配はない

しかし、相手の今回の目的は分からなかったが、最終的な目的は分かっていた

新世界の作成。やつらが電波人間を殺すほどの力を持ちながら殺さないのは、新世界には電波人間だけの世界を作ろうとしているのだらう

痛い思いをしても、殺されることはない。レイ・ブラックはそう考えたが、恐いことには変わらない

ナンゴヤの戦い 敵の目的！編（後書き）

ロックマンエグゼ6の、シーサイドエリア1の掲示板に
「ジョニー」の名前が・・・

ナンゴヤの戦い！ レイ・ブリック編（前書き）

長い

ナンゴヤの戦い！ レイ・ブラック編

「いくぞ！」

銀色の騎士が掛け声と共にレイ・ブラックに剣を構え突っ込んでくる（攻撃する前に合図してくれるなんて、騎士道なのか、バカなのか）一瞬そう思ったレイ・ブラックは、余裕で騎士の攻撃を避ける

攻撃があたらなかった騎士はもう一度突っ込んでくるよけきれないと判断したレイ・ブラックは手品のように宙から剣を取り出し、敵の剣を受け止める受け止める。

銀色の騎士は疲れているとは言っても、普通の攻撃より威力があり、レイ・ブラックは吹っ飛ばされそうになった

剣を受け止めたまま、レイ・ブラックは後方に飛びのく

「いくぜ！騒霊！」

レイ・ブラックが叫ぶと、彼の後ろから、赤、青、緑、白。色とりどりの小さな幽霊が出てきた
色とりどりの霊は、一度お辞儀をすると銀色の騎士に向かって突進していった

「何度やっても効かん！」

他の電波人間と一緒に戦っているときさえ、効果はなかったので、無駄だと分かっていた

銀色の騎士は前に進みながら、突進してくる幽霊を次々と剣で切り捨てる

「お次も行くぜ！自縛霊！」

レイ・ブラックが叫ぶと、銀色の騎士の足元に影がまとわりつき、銀色の騎士の動きを封じた

銀色の騎士は足元の影を切ろうとするが、いまだに突進してくる幽霊のせいで、タイミングがつかめない

突如、騎士の足元の影が赤くなった途端、影が大爆発した

「やったか？」

つぶやくレイ・ブラック

しかし、煙が割れ、中から白い光が一直線にレイ・ブラックに向かってくる

「亡霊！」

レイ・ブラックは、大きな盾を持った幽霊を召喚して、白い光を防ぐ盾を持った幽霊が消えかけたとき、背中に悪寒がした

『ユウキ！うしろだ！』

黒井ユウキのウィザード、レイが叫ぶが、遅かった

振り向こうとした瞬間、宙に吹っ飛ばされた

不意の攻撃で、体勢も整えられず地面をすべる、レイ・ブラック

そして、倒れているレイ・ブラックの目の前に現れた銀色の騎士

自縛霊の攻撃が強かったのか、所々傷がある

騎士が、剣を振り下ろす寸前、レイ・ブラックは盾を持つ幽霊を召喚する

攻撃を防がれた騎士は後ろに下がる

「なかなか、やるようだな」

「お前にほめられたって、うれしくねえよ」

立ち上がって言い返す、レイ・ブラック

さっきの攻撃が効いたのか、立つのがやっとのレイ・ブラック

「背後霊」

小さくつぶやいた後、今度は大きく叫ぶ

騎士の背後に、背の高い、剣を持った半透明の幽霊が五体、静かに現れる

騎士は気付いていない

「騒霊！」

レイ・ブラックが叫ぶと色とりどりの幽霊が現れる

騎士は構えるが、その時、後ろからの五体の一斉攻撃を受けてしまった

体勢をくずす騎士に、容赦なく襲い掛かる幽霊達

次々と幽霊を召喚して騎士にぶつける

これは、リンチと言ってもいい光景だった

突然、騎士のいる辺りから、銀色のものが空に飛んでいった

「なんだありや？」

空に向かって飛んでいったのは銀色の騎士の盾だった

盾は空中で止まり、盾の表、太陽を模したであろう紋章がレイ・ブラックのいる向きで止まった

突然、盾からレイ・ブラックの方へ光が突き進んできた

レイ・ブラックは霊を召喚して防ぐ

しかし、その時、銀色の騎士がいた方向からもう一つ、大きな光が一直線に進んできた

「ぐわあああ！！」

反応できずに、もろに喰らったレイ・ブラックはその場に倒れた

ナンゴヤの戦い！ レイ・ブラック編（後書き）

皆さん気付いたかどうかと思いますが

レイ・ブラックの攻撃は名前が全てオヤジギャグです

騒霊は、「騒」を総で全員という意味、「霊」は、おじぎの礼です

自縛霊は、自爆する霊

背後霊は、highで高い、「後」は五体の霊という意味です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9797i/>

新しい流星

2010年10月8日13時54分発行